

アサギマダラが好むフジバカマの世話に地域住民と
取り組む高校生ら



アサギマダラ タテハチョウ科。全長10センチほどで、鮮やかな羽の模様が特徴。日本列島を春から夏にかけて北上、秋にかけて南下する。県内にはほぼ毎年訪れ、2023年も10月に宇和島市や大洲市で確認されている。

▲道の駅で確認されたアサギマダラ
(提供写真)

「旅するチョウ」として知られるアサギマダラが県内に相次いで姿を見せ、地域に潤いと笑顔をもたらしている。松山市内では、アサギマダラが好むフジバカマを植えた住民や高校生が「旅人招致」に尽力し、地域ぐるみで楽しむ場が展開。以前は多くの個体が見られた道の駅では、チョウの「休憩所」として再びにぎやかになるよう取り組みを進めている。

アサギマダラ 松山で「招致」に尽力

松山学院高校(同市北久米町)そばの畑では、近くの児玉知幸さん(75)がフジバカマを2020年から植えて付け。それを聞いた同校調理科の生徒らが翌年から草引きや水やりなどの手助けを始めた。児玉さんの畑に隣接する同校の畑に約60株を移植。昨秋に念願の「待ち人」が訪れた。



今春、株を増やすと10月6日から現れ始め、1日最高9匹を確認。昨年比に比べ倍増しており、2年杉原優一さん(16)と石垣呂唯さん(17)は「思っていたより大きく、きれい」と笑顔を見せる。

近くの住民が訪れて世話をしたり、観察に来たりと畑は地域の社交的な存在に発展。生徒らは、校内のほか所有者から管理を任せられる学校付近の

旅するチョウ、ようこそ

住民や高校生ら フジバカマ植栽

里山にもフジバカマを植えており、1年山内梅花さん(15)と児玉さんは「アサギマダラの『里』になるよう活動を続けたい」と今後を見据えている。

以前は多くのアサギマダラが一休みしていた道の駅「風早の郷(さと)」(同増やし、アサギマダラの市大浦)。市内外から大「休憩所」になるよう意欲

が、数年前にフジバカマが枯れてしまっていた。吉田勇二(一)駅長(66)らが復活を期し9月にフジバカマ32株を植え付け。ピンク、白色の花を咲かせ70〜90センチほどに育っているが「数も少なく今年は難しいと思っていた」という。

それが、10月2日に4匹ほど飛来、その後も定期的に見られるようになった。かつての光景を間近で見ていた職員の土井内安美さん(66)は「戻ってきてくれてうれし」とほほ毎日観察している。

風和里は地元産の海産物や旬の野菜、土産物などを扱う人気の道の駅で、

5月にはお遍路さんの休憩所も完成した。吉田駅長は今後もフジバカマを